

興福寺大法師等の長歌私注

倉野憲司

はしがき

第五十四代の仁明天皇は、嘉祥二年（西暦八四九）三月に宝算四十を迎へられた。興福寺の大法師たちはこれを奉祝するために、佛像四十軀を造り、金剛壽命陀羅尼經四十卷を写して四万八千卷を転読し、これが竟はると、更に、

天人は芥子を拾はず（芥子劫）、天女は石を払ふことをやめて

御薬を撃げ（磐石劫）俱に來たつてつゝしみつかへまつる像

浦の島子が暫く雲漢に昇つて長生を得た像

吉野の女が遠く上天に通つて、來たりまた去る像

などを作つて、これに長歌を副へて奉獻したのである。その長歌を仮りに「興福寺大法師等の長歌」と呼ぶことにするが、それは続日本後紀の卷十九に採録されてゐる。

ところでこの長歌を正史に採録した理由について、続後紀の撰者は次のやうに記してゐる。

夫れ倭歌の体は、比興を先と為す。人情を感動せしむるは、最も茲れに在り。季世陵遲、斯の道已に墜つ。今、僧の中に頗る古語を存す。礼失はるれば則ち之れを野に求むと謂ひつべし。

故に採りて之れを載す。（原漢文）

これによると、人の心を最も感動させる倭歌は、末の世になつて衰へ、宮廷においては既に歌道は墮落してしまつた。然るに今、僧侶の歌に伝統的な古語を多く用ゐたりつばな歌がある。礼が失はれるとこれを野に求めるといふことがあるので、この歌を採つて載せたいふ事情がわかる。

この長歌は大体三百十句から成つてゐるが、万葉集における人麿の最大長歌は百四十九句であるから、その二倍以上であり、万葉式の長歌としては、まさに古今独歩の一大長篇といへるのである。この歌は、内容の上からはもちろん、格調や形式の上からも、また文学史的位の上からも、注目に値するものを含んでゐるが、従来殆ど顧みられずに今日に至つてゐる。私は私の書いたものの中に、部分的にはこの歌に触れたことがあり、また昭和十五年の十二月二、三、四の三日間、東京中央放送局から全般的な解説を放送したことがあるが、こゝに改めてこの長歌を便宜五段に分けて私注を施し、この埋もれた珠玉を一般に紹介しようと思ふのである。

第一 一段

日の本の、野馬台の国を、賀美侶伎の、宿那毘古那
が、葦管を、殖多生しつづ、国固め、造りけむより、
瀛つ波、起つ年毎に、春は有れど、今年の春は、物毎
に、滋り榮えて、天地の、神も悦び、海山も、色声変
し、梅柳、常より殊に、敷き榮え、咲まひ開きて、鶯
も、声改めて、八千種に、奇しき事は、茜刺し、天照
る国の、日の宮の、聖の御子ぞ、瓠葛の、天の梯建、
踐み歩み、天降り坐しし、大八洲、天つ日嗣の、高御
座、万世鎮ふ、五八の、春に有りけり。

言ふまでもなく、原文はすべて漢字で、助詞や助動詞や活用語尾等を小書きにした宣命書きであるが、読者の便宜を慮つて、右のやうに平仮名交りに改めた。(以下同じ)

まづ冒頭に「日の本の、倭の国を」と歌ひ上げてゐることが注意される。これはこの長歌が強い国家的自覚の下に作られたことを端的に示してゐるが、この自覚はこの長歌を貫いて、全篇の基調をなしてゐるといふことができる。悠遠なる神代の国作りの神話から説き起こして、天孫降臨、ひいては今上に及ぶといふ第一段の構想からして、既にさうである。ただ記紀、風土記、万葉等においては、この国を作り堅めたのは、オホナムヂとスクナビコナの二柱の神とされてゐるが、この長歌ではスクナビコナの二柱としてゐて、伝を

異にして居り、またスクナビコナをカミロキ(皇祖神)とし、その神が葦や管を植多そだてて国を作り堅めたといふことも、他には見えない所伝である。九世紀の頃には、かうした言ひ伝へも一部にはあつたのであらう。また天孫降臨についても、天孫ニニギノ命が、天の梯立てを踏み歩いて天降られたとしてゐるが、記紀には天の浮橋を通つてお降りになつたと伝へてゐて、これもやゝ伝を異にしてゐる。

次に「天地の神も悦び、海や山もその色や声をいつもとは違つたよろこびの色や声に変へ、梅や柳も常の年よりは格別に榮えてよろこびの花を綻ばせ、鶯も鳴く音を改めて、種々様々に奇瑞が現はれたが、それは……今上陛下の万歳をいはふ宝算四十の春だからである。」といふあたりは、例の人麿の、

やすみしし、吾が大君、神ながら、神さびせずと、芳野川、たぎつ河内に、高殿を、高知りまして、登り立ち、国見をせせば、たたなはる、青垣山、山祇の、まつる御調と、春べは、花かざし持ち、秋立てば、黄葉かざせり。ゆきそふ、川の神も、大御饌に、仕へまつると、上つ瀬に、鶉川を立ち、下つ瀬に、小網さし渡す。山川も、よりてつかふる、神の御代かも。(巻一、三八)

といふ長歌に示された思想信仰と揆を一にするものであつて、山川河海草木禽獸等が天皇に奉仕するといふ思想信仰は、人麿以来この長歌にまで流れてゐることが知られる。「日の本の」「瀛つ波」「茜刺し」「瓠葛の」は何れも枕詞。「八千種」は種々様々に、「奇しき事は」は奇瑞が現はれた事は、下の「春にありけり」に係

る。「天照る国」は天上に照り輝やく国、即ち高天の原、「日の宮」は日の神の宮殿、「聖の御子」はニニギノ命。「天降り坐しし大八洲」以下は、天降りになつた大八島国、その大八島国を天つ日嗣の高御座にまして代々の天皇が治めて来られて今上に及んだが、今上は今年四十の宝算を迎へられ、その万歳をことほぐ春であるからであるの意。

第二 二段

我が国の、聖の皇は、尊くも、御坐すか。日の宮の、聖の御子の、天の下に、御坐して、御世御世に、相承け襲ぎて、皇毎に、現人神と、成り給ひ、御坐せば、四方の国、隣りの皇は、百嗣に、継ぐと云ふとも、何でか、等しく有らむ。所以に、神も順ひ、仏さへ、敬ひ給ふ。益益に、今我が帝は、往古にも、御坐さじ。将来も、何に申さむ。釈迦の法、弘め給ひて、出家の人、法の族を、罪有れど、赦し賜ひつ。答有れど、宥め賜ひつ。譬无き、御恵の、異に広く、御坐せば、家人、法の族は、御世世、恒に惜しむと、年月を、堰かへ首めて、過ぐさずて、鎮はむとこそ、誓願ひ、禱り申せ。然れども、世の理と、歎びの、春に有りけり。

この段は前後の二小節に分けることができる。前小節は「敬ひ給ふ」までであるが、そこには人麿同様に、天皇を現人神とする思想信仰が鮮明に示されてゐる。而もそれが外国の君主との比較において歌はれてゐることは注意すべきことである。後の小節は、仁明天皇の仁慈について歌つてゐるが、その仁慈の対象を出家僧尼に絞つてゐることは、やゝ我田引水であると言はねばならない。「聖の皇」は聖天子、貴い天皇。「御坐して」はいらつしやつて。「隣りの皇」は隣国シナや朝鮮の君主。「百嗣に」以下は、たとへ次々と百代帝位を継承しても、どうして我が天皇と等しからう、全く違つてゐるの意。「益益に」はその上一層。「今我が帝」は今上陛下即ち仁明天皇。「将来も、何に申さむ」は、将来にも、どう申したらよからうか、多分御出現にはならないであらうの意。「法の族」は僧尼。「宥め」は赦すに同じ。「異に」は殊に、非常にの意。「大御世世」以下は、君の御世を常に惜しむ余りに、年月をせきとめて過ぎ行かせないで護らうと、仏に祈り願ひ申している。けれども四季の移り変りは自然の道理であつて、今歎びの春を迎へたの意。

第三 三段

何にして、帝の御世、万代に、重ね飾りて、榮えしめ、奉らむと、柘の枝の、由求むれば、仏こそ、願ひ成したべ、聖のみ、験はいませ。所以に、帝を鎮ふに、験ます、陀羅尼の御法、四十卷を、写し繕へ、護り成す、聖の御像、四十軀、造り奉りて、四十の師

の、悟り開けて、行ふ人を、調へて、誠を致し、四方よつうに、八千巻添へて、誓願こひねがひ、読よみ奉り、飾り祈いのみ、鎮ちんひ申せり。

この段の大意は、どうして君の御世を万年の後までもりつばに重ねて、榮えさせ申さうかと、不老長生のいはれを求めると、仏こそその願ひを成就させて下さり、仏だけがその靈験がおりになるのである。そこで君の齡を護るために、宝算の四十に囚んで、靈験あらたかな金剛壽命陀羅尼經四十巻を写しととのへ、玉体を護る仏像四十体を作り、悟りの開けた高僧四十人を揃へ、真心をこめて四万八千巻を転読して、聖壽の万歳を願ひ祈り護り申すのである、といふのである。僧侶に適はしい鎮護国家のやりかたといふべきであらう。(「柘の枝の由」は柘の枝の伝説の意ではあるまい。柘枝伝に仏が不老長生を成就させるといふやうなことがあるとは思はれないからである。ここは「不老長生のいはれ」の意にとるべきではあるまいか。)

第 四 段

行へる、此れの所為態しわざを、何いかにして、陳べ聞えむと、茜刺ひねもす、終日ひねもすからに、烏玉ねぼたまの、さ夜通よほすまで、時日とき経て、思へる時に、落湍たぎつせの、堰せかへもかねて、世の中よの、いすがし態わざを、添へ餅かざり、申しぞ上ぐる。就中そのなかに、大海の、白浪開き、常世島とこよ、国成し建てて、到り

住み、聞き見る人は、万世の、壽を延べつ。故事に、云ひ語り来たる、澄の江の、淵に釣せし、皇の民、浦の島子が、天つ女あまめに、釣られ来たりて、紫の、雲たなび引きて、片時に、將て飛び往きて、是れぞ此の、常世の国と、語らひて、七日経しから、限り無く、命有りしは、此の島にこそ、有りけらし。三吉野に、有りし熊志禰しね、天つ女あまめの、来たり通ひて、其の後は、譴蒙せめかがふりて、ひれ衣ころも、着て飛びにきと云ふ。是れも亦、此れの島根の、人にこそ、有りきと云ふなれ。五種の、宝の雲は、大悲者の、千種の御手の、人の世を、万代延ぶる、一種を、別にこと莊りて、万代に、皇を鎮へり。磯の上の、緑の松は、百種の、葛かづらに別に、藤の花、開き榮えて、万世に、皇を鎮へり。鶯は、枝に遊びて、飛び舞ひて、囀り歌ひ、万世に、皇を鎮へり。沢の鶴たづのち、命を長み、浜に出でて、歛みぢび舞ひて、満潮の、断たゆる時無く、万代に、皇を鎮へり。薰修法の、力を広み、大悲者の、護りを厚み、万代に、大御世成せば、八十里如す、城きに芥子拾ふ、天人は、手を挙げて、拾はず成りぬ。八百里如す、磐が根を、ひれ衣ころも、裾垂れ飛たばし、払ふ人、払はず成りて、皇の、護りの法の、葉を、撃なげ持ち、来たり候ふ。是くの如く、鎮へる事は、事毎に、劣せなけれども、物毎に、数に非らねど、旅人

に、宿春日なる、山階の、仏聖の、奉献りたまふなり。

この段はこの長歌の眼目ともいふべき寿詞(賀詞)の部分である。即ち、浦の島子、吉野の熊志禰、千手観音、芥子劫及び磐石劫の天人の像によそへ、また松、藤の花、鶯、鶴によそへて、御代の長久、聖寿の万歳をことほいでゐるのである。古来寿詞の代表的なものとして、出雲国造神賀詞と中臣寿詞を挙げることができるが、この長歌は出雲国造神賀詞に甚だ似通つた性質を有してゐる。殊に朝廷に献る神宝や御贄によそへて、聖寿の長久、御代の隆昌をことほぐ神賀詞の一節――

白玉の大御白髪坐し、赤玉の御あからび坐し、青玉の水江の玉の行相に、明つ御神と大八島国知らしめす、天皇命の手長の大御世を、御横刀広らにうち堅め、白御馬の前足の爪、後足の爪、踏み立つる事は、大宮の内外の御門の柱を、上つ石根に踏み堅め、下つ石根に踏み凝らし、振り立つる耳の彌高に、天の下を知らしめさむ事の志のため、白鵠の生御調の玩物と、倭文の大御心もたしに、彼方の古川岸、此方の古川岸に生ひ立つ若水沼間の、彌若えに御若え坐し、すすき振るをどみの水の、彌をちに御をち坐し、まそひの大御鏡の面を、おしはるかして見そなはず事のごとく、明つ御神の、大八島国を、天地日月と共に、安らけく平らけく知らしめさむ事の志のためと、御禱の神宝を撃げ持ちて、神の礼じろ、臣の礼じろと、恐み恐みも、天つ次の神賀の吉詞白し賜はくと奏す。

――は、この段と全く揆を一にしてゐるといふことができる。神賀詞は文字通りに、神がたてまつる賀詞である。出雲の国造が奏上するものであるが、実は出雲鎮座の百八十六社の神々が、「神の礼じろ」(神からの敬意を表する捧げ物)を献つて、聖寿の万歳をことほぐものである。然るにこの段においても、「是くの如、鎮へる事は、事毎に、劣なけれども、物毎に、数に非らねど、旅人に、宿春日なる、山階の、仏聖の、奉献りたまふなり。」と歌つてゐて、君をいはつて献るもろもろの像は、私ども大法師たちが献るのではなくして、外ならぬ興福寺の御仏が献り給ふものであるとしてゐる。「旅人に宿」はカスガを言ひ起こす序。「山階」は山階寺、即ち興福寺のこと。彼は神々であり、此は御仏であるが、共に聖寿の万歳をことほぎ奉るといふ点に共通の思想信仰が胚胎してゐることを見通してはならない。

さてこの段の解説をいささか試みることにする。

まづ「浦の島子」「浦島の子」と読んではいけない。丹後風土記逸文参照。であるが、その大意は、澄の江の淵に釣をしてゐた天皇の民の「浦の島子」が、天女に引かされて来て、「釣られ来たりにて」といふ言ひ方は面白い。紫の雲がたなびいて、ほんの一瞬の間に、天女は島子を連れて飛んで行つて、これがあの常世(不老長生)の国ですよと言つて契りを交して、ほんの七日しか経たなかつたのに、この上ない長生きをしたのは、この常世の島であつたさうな、といふのである。浦の島子の伝説は、丹後風土記の逸文、万葉集巻九、一七四〇番、本朝神仙伝等に見えてゐるが、この段の所伝もその一つである。簡単に他の所伝と十分比較することはできな

いが、仙境滯留期間を他の所伝は何れも三年としてゐるのに、この所伝のは僅かの七日である。(尤も万葉に「七日まで、家にも来ずて、海堺を、過ぎて傍ぎ行くに」とある七日と或いは關係があるかも知れない。)また「紫の雲泛引きて」も他に見えない伝である。更にまた続後紀の撰者は、「浦島子、暫昇雲漢一、而得長生二」た像を作つたと記してゐるが、島子が雲漢(天の川、天上界)に昇つて長生を得たといふ伝は、海のあなたの常世の国へ行つたとする伝と趣を異にして居り、ともかくこれらは、浦の島子に関する異伝として注意して然るべきものであらう。

次は吉野の熊志禰であるが、その大意は、吉野に居た熊志禰のもとに、天女が通つて来たが、後には咎めを受けて、褶衣を着て天上界へ飛んで行つてしまつたといふことである。これも亦、この常世の島の人であつたと伝へられてゐる、といふのである。これはいはゆる柘の枝伝説の一つである。古く「柘枝伝」といふものがあつたやうであるが、万葉集にその名を喩めてゐるのみである。さうして万葉集と懷風藻とに、ほんの僅かな断片が残つてゐて、共に主人公の名をウマシネ(味稻、美稻)としてゐるが、所伝はそれぞれ異なつてゐるもののやうである。(拙著「古典と上代精神」所収の「柘枝伝」参照。)ところでこの長歌の所伝は、それらとも亦異なつて居り、男の名もクマシネとあつてやや相違してゐるが、三者の中では比較的とのつた内容を有してゐて、柘枝伝を考察する上の大切な資料であると思ふのである。ただ続後紀の撰者が、「吉野女、眇通二上天一而来且去」る像を作つたと記してゐるのは、長歌の所伝と矛盾してゐる。恐らくそのやうな伝があつたのではなく、撰者の

ミスではあるまいか。或いは表現の不足かも知れない。

次に、八十里もある広い城で芥子粒を拾ふ天人は、手を挙げてしまつて拾はなくなつた。また八百里もある広い岩を、褶衣の裾を垂れて払ふ人も払はなくなつたといふのは、智度論や菩薩瓔珞本業經などに見える「芥子劫」と「磐石劫」に基づいたものである。即ち智度論五によると、「仏が譬喩を以つて劫の義を説いた。——長寿の人があつて、百年毎に一度来て、四十里の石山(同三十八には「方百由旬の石」)を、細軟の衣で払拭し、この大石を尽くしても、劫はまだ尽きない。また四十里の大城(同三十八には「方百由旬の城」)に芥子を満たし、長寿の人が百年に一度来て、一つの芥子粒を取り、かうして芥子粒を取り尽くしても、劫はやはり尽きない。」とある。因みに菩薩瓔珞本業經下には、「又八百里の石あり。淨居天の衣の重さ三銖を以ちて、淨居天の日月歳數三年に一たび払ひて此石を尽すを一大阿僧祇劫となす。」とある。その大石を払はず、その芥子粒を拾はなくなつたといふのは、無数長時の到来を意味し、僧侶としては聖寿の長久をことほぐに適はしい取材といへるのである。「茜刺す」「烏玉の」「落湍の」「満潮の」は何れも枕詞。「寝かへもかねて」は、寝きとどめることができなないで。「いすがし態」は、語意未詳。「大悲者」は観音菩薩、ここでは千手観音。「千種の御手」は、千手観音の千手。「五種の宝の雲」は、千手観音の右の一手に持ち給ふ五色の雲。「一種を別に莊りて」は、その一手を特別に飾つて。「百種の葛に別に」は、いろいろな葛の中で特にの意。「薰修法」は、徳化を受けて修行する法。

第五段

大御世を、万代祈り、仏にも、神にも、申し上ぐる、事の詞は、此の国の、本の詞に、逐ひ倚りて、唐の、詞を仮らず、書き記す、博士雇はず。此の国の、云ひ伝ふらく、日の本の、倭の国は、言玉の、当ふ国とぞ、古語に、流へ来たれる。神語に、伝へ来たれる。伝へ来し、事の任まに、本の世の、事尋ぬれば、歌語に、詠ひ反して、神事に、用ゐる来たれり。皇事に、用ゐる来たれり。本の世に、依り遵ひて、仏にも、神にも、拳げ陳べて、禱りし誠は、丁寧と、聞こしめしてむ。嬰兒の、孩き語に、折箸の、本末知らず、乱れ糸の、乱れて有れど、九重の、御垣の下に、常世鷹、率ひ連ねて、さ牡鹿の、膝折り反し、候ひて、聞えぞ言す。何に以聞えむ。汗流し、兢恐まる。何に以聞えむ。

この段の大意は、君の大御代を万世までもと祈つて、仏にも神にも申し上げる事を表現する言葉は、この国固有のやまと言葉に従つて、漢語は仮借せず、書き記すのに、漢学の博士などは雇はない。この国で昔から言ひ伝へることに、「日の本の倭の国は、言玉の幸はふ国である。」と、古い言葉に伝へて来てゐる。神聖な言葉に伝へて来てゐる。伝へて来た事柄に従つて、古い時代の事を尋ねて

みると、固有のやまと言葉は、歌語として繰り返し繰り返し詠つて、神の祭儀に用ゐて来てゐる。宮廷の御儀に用ゐて来てゐる。そこで私どもも、古い時代のしきたりに従つて、固有のやまと言葉で以つて、仏にも神にも申し上げて、君の万歳を祈つた真心は、懇切である、神も仏もお聞き下さることであらう。幼稚な言葉で事の本末もわきまへず、乱れてはゐるが、宮城の御垣のもとに、一同誘ひ連れて、膝を折つて控えて言上する次第である。どのやうに言上したらよいか。汗を流して恐懼してゐる。どのやうに言上したらよいか。といふのである。（「日の本の」「嬰兒の」「折箸の」「乱れ糸の」「常世鷹」「さ牡鹿の」は何れも枕詞。最初の「神にも」及び「皇事に用ゐる来たれり」の句の無い伝本もある。「当」の字をサキハフと訓むのは、一寸無理なやうにも思はれるが、当には適の意があるから宛てたのであらう。従つてカナヘルとも訓めるが、言ひならはしに従つてサキハフと訓んだ。）

さてこの段には、国語を尊重し愛護する精神が、声高らかに歌ひ上げられてゐる。「唐の詞を仮らず、書き記す博士雇はず」と、真向うから漢語、漢文学に挑戦してゐるのである。これは弘仁時代を全盛期とした漢文学に対する国民的自覚のあらはれであり、それに対する露骨なレジスタンスであるが、常に仏典に親しみ、万巻の経を読み、漢字仏語に明け暮れてゐる僧徒が、漢語漢文の排撃を高唱して、国語尊重の毅然たる態度を取つたといふことは、今日からは想像も及ばない興味深いことである。一般には漢文学に対する国民的自覚の最初の現はれは、紀貫之の古今集仮名序と見られてゐるやうである。しかしそれより五十数年前に、既にこのやうな宣言が行

はれ、それが実践されてゐることは注目すべきであり、さうした意味からも、この長歌の有する意義と価値とは、改めて見直されてよいであらう。ただ「釈迦」「陀羅尼」「大悲者」「薰修法」「博士」等の固有名詞や熟語は、やむを得ず仏語や漢語をそのまま使用してゐるが、その他はすべて、「此の国の本の詞に逐ひ倚」つてゐることは言ふまでもない。

む す び

以上述べたところによつて、興福寺大法師等の長歌の大凡は知られたであらう。それは長歌の形式を取つてゐるが、実質は寿詞であつて、出雲国造神賀詞に相似た性質のものである。全篇を通じて注目すべき特色を要約すると、次の通りである。

- 1 万葉式の最大の長歌で、句数約三百十、初めあり中あり終りある見事な構成である。
- 2 強い国家的（国民的）自覚が全篇の基調をなしてゐる。
- 3 天皇現人神の思想信仰が強調されてゐる。
- 4 神話や説話を素材の一部としてゐる。
- 5 漢語や漢文を排して、固有のやまと言葉を尊重愛護する態度を鮮明に打ち出してゐて、国文学史の上に注目すべき位置を占めてゐる。
- 6 五七調に七五調を加味した過渡的形式の長歌である。

最後に、右の6について一言して置きたい。この長歌は、人麿の作品ほど洗煉されたものではなく、幾分泥臭さが感じられる。一句の含む音数も、大体五言、七言を主としてゐるが、中には四言、六

言、八言等もあつて、荒削りであり、不定型である。しかしこの長歌における形式上の特色は、五七調を主軸としながらも、数箇所に亘つて七五調が加味されてゐることにある。即ち、

日本の本の 野馬合の国を (五七)
 賀美侶伎の 宿那毘古那が (五七)
 葦菅を 殖ゑ生しつづ (五七)
 国固め 造りけむより (五七)
 のやうに、五七で押して行くのを基調としてゐるが、所によつては、それが、

茜刺し 天照る国の (五七)
 日の宮の 聖の御子ぞ (五七)
 瓢箪の 天の梯立 践み歩み (五七五)
 天降り坐しし 大八洲 (八五)
 天つ日嗣の 高御座 (七五)
 万世鎮ふ 五八の (七四)
 春に有りけり (七)

のやうに、中途から七五調に変へられてゐる。同様な例は、
 験しるします 陀羅尼の御法 (五七)
 四十巻を 写し繕へ (五七)
 護り成す 聖の御像 (五七)
 四十軀 造り牽りて (五七)
 四十の師の 悟り開けて (五七)
 行ふ人を 調へて (七五)
 誠を致し 四方に (七五)

八千卷添へて 誓願こひねがひ (七五)

読み奉りたてまつ 飾り祈のみ (七五)

鎮しづひ申せり (七)

などにも見られ、また、

薫修法の 力を広み (五七)

大悲者の 護りを厚み (五七)

万代に 大御世成せば (五七)

八十里如なす 城きに芥子拾きふ 天人は (六七五)

手を挙げて 拾きはず成りぬ (五七)

八百里如なす 磐が根を (六五)

ひれ衣 裾垂れ飛ばし (五七)

払はふ人 払ははずなりて (五七)

のやうな例もある。周知のやうに、万葉集の長歌は五七調であり、古今集以後の長歌は七五調である。然るにこの長歌は五七調の中に七五調を混へてゐて、万葉から古今への過渡的様相を示してゐる。さうして作られた時代も、まさに万葉と古今との中間である。表現も万葉的なものと古今的なものとが混つてゐる。即ちこの長歌は、万葉と古今との橋渡しの役目をつとめてゐるといふことができ、そこにも見通すことのできない重要な文学史的意義が存してゐるのである。

以上、甚だ粗略で十分意を尽くしてゐないが未だに顧みられないで棄て去られてゐるこの長歌を、敢へて江湖に紹介して、その注意を喚起し、今後種々の方面から十分に研究されて、その正当な価値が判定されることを念願して、この不文を草した次第である。